

一歩踏み出して見えたもの

福島県いわき市立中央台南中学校

一年 清水 朋子

いつも何か新しいことを始めるときは、必ずと言っていいほど、妹の後を追いかけるように、半分泣きながらやってきたように思う。水泳を始めた時も、英語やピアノを習い始めた時も、新しい集団や環境に飛び込むのが怖くて、じたばたして泣き、最後は妹に先を越されたくないという思いで、無理やり最初の一步を突破してきた。そしてこれも毎回そうなのだが、始めてみて嫌だったことは一度もないのだ。ピアノもすぐに夢中になり、秋の合唱コンクールでは伴奏をする予定だ。新しいチャレンジの先には必ずいいことや楽しいことがあるのが分かっていても、自分から最初の一步を踏み出すことができない。それが幼い頃から私の抱えている自分への悩みだった。

そんな時に、東京に住む叔母から、「今度みんなでアイルランド行こうよ。」

という提案があった。叔母はアイルランド関係の仕事をしているので、夏の間、私と妹、そして叔母と従妹と祖母の三世代女五人で二週間ほど語学留学してみようという提案だった。私にとって、親と離れて英語だけの生活に飛び込むというのは、とても大きなチャレンジといえるが、今回も、即決した妹の

決断を追うように、私は初めて外国に語学留学に行くことを決心したのであった。

アイルランドに着き、私はホームステイ先から一人で歩いてジュニア向けのスクールに通うことになった。スクールでの約束事は、「ノーギャパニーズ」ということ。スペインからの生徒が一番多く、他にもサウジアラビアやロシア、コロンビアなど、様々な母国語を持った仲間たちが、英語だけでコミュニケーションを取り合う生活である。私は日本にいる時も英語は好きだったが、それは、学校の授業で、テキストの勉強をし、分からなければ先生が教えてくれる環境の中での英語であって、ここではそれは通用しない。日本語のない世界でどうコミュニケーションを取るのか。最初の二日ぐらいは、それが難しく、苦戦した。よく一人で買い物をしたのだが、その時値段を言われても、現地の英語はとても速く聞き取るのが難しかった。私は、分からない時は分からないと相手に伝えようと努力した。片言の英語でも、表情と身振り手振り伝えたい気持ちがあれば、どうにか通じると分かり、ほっとした。そんな小さな冒険を積み重ねるうちに、英語はやはり、話すのが楽しいと実感することができた。

スクールで学んだのは、言葉だけでなく、それぞれのメンバーの国民性である。アジア系は私一人で、日本人は控え目な国民性だと自覚していたが、みんなで写真を撮るたびに驚いたのは、どの子も当たり前のように、写真撮影用の決めポーズがあるということ。日本だったら、モデル気取りだと陰口を言われそうなポーズをごく自然にとっていた。少しも嫌味はなく、日本人がよくやるVサインは存在せず、自分の良いところをアピールするのがとても上手だと感じた。他にも、週末にバスで北アイルランドにあるジャイアンツコースウエイという世界自然遺産

へ行った。バスで片道三時間ちょっとかかるのだが、スペイン人は声が大きく、コロンビア人やロシア人などが、静かに寝たりおしゃべりしたりする中、スペイン人はスペインの歌をみんな熱唱していた。先生の話だと、スペイン人はいつもこんな感じだそう。私が一番仲良くなったラゲルもスペイン人で、私のスクール生活をいつも楽しく盛り上げてくれた。日本に関心がある人が多いことにも驚いた。私より年上のエマは、日本のアニメが好きで、「こんにちは。」と挨拶してくれた。漢字に興味があるようで、エマだけでなく、何人もの友達に漢字で自分の名前を書いてほしいと頼まれた。なるべく縁起が良い漢字を選んで当て字にし、片言の英語を使って、読み方と漢字の意味を伝えたら、とても喜んでくれた。日本にいる時は当たり前すぎて特に意識しなかった日本の文化が誇らしく思えた。

今回のアイルランドでの体験は、今までどうしても打ち破れなかった、新しい世界に一歩踏み出す勇氣を私に与えてくれた。そして一歩踏み出した先に見えたものは、世界は広いということ。人種も文化も国民性も多様だけれど、それでも分かり合おうとすれば、難しく考えなくてもいくらでも分かり合えるということ全体で感じることができた。

私は今、英語を話すことが楽しくて仕方がない。英語は受験科目ではなく、世界中のみんなとつながることができるコミュニケーションツールだと思えるようになった。今私の心の中にあふれている、世界の人々と繋がりたいという気持ちを大切にしようと思う。そして、私もスクールのみんなに負けぬような、写真の決めポーズを練習して、今度は一人で海外留学にチャレンジしたい。